

ユーラシアンホットライン

●テルメズ市のカラテパ遺跡に加藤九祚記念碑建立を要望

●「中央アジアシルクロード歴史文化センター」設置案提案

●毎年加藤先生の命日に、ドゥシャンベ―テルメズ―サマルカンド九さん忌ツアーを模索

25 日テルメズ市でスルハンダリヤ州知事、26 日に文化省副大臣、ピダエフ芸術研究所長
22, 23 日タジキスタン首都ドゥシャンベでザリフィ前駐日大使 (元外務大臣) に面会

—「こころはいつも旅する」という九さんの心のメッセージを刻んだ碑を建てたい—

漫然と活動を続ける時期は終わった。加藤九祚先生を顕彰する活動を続ける。この二つの問題意識で、ユーラシアンクラブの次のステップに向けて準備が続いています。その一端を本号で紹介します。

4 月下旬、私は、ウズベキスタン政府への協力で振り返り
回された二年間を総括して、まず当初の目的であった
「加藤九祚顕彰碑」をテルメズ市で加藤先生が発掘を
続けたカラテパ遺跡内に設置するためウズベキスタン
を訪問します。

また私は、タジキスタン共和国の首都ドゥシャンベの
ハムロホン・ザリフィ前駐日大使 (元外務大臣) に連
絡して、「加藤記念碑」の石材としてパミールの大理石
の寄贈をお願いするために訪問し、さらに加工まで検
討していただくことにしました。ザリフィさんには、
加工業者との面会、経費の見積もり、記念碑の内容、
製作プロセス、などを合意できる業者の紹介を依頼し
ています。加藤先生は、将来タジキスタン、アフガニ
スタンからパキスタン、インドにまで自由に日本人が
旅行できる日の来ることを夢見ている—と先生晩年の
一人雑誌「アイハヌム」に書いていました。テルメズ
市、テルメズ区、スルハンダリヤ州とタジキスタンを
結ぶ、加藤先生を顕彰するツアールートに風穴を開け
たいという希望を持って訪問します。

加藤先生が亡くなった 2016 年末、「加藤九祚先生を
顕彰する会」を服部英二・元ユネスコ事務総長顧問、
田中哲二・中央アジアコーカサス研究所所長さんと
発足させ、テルメズに加藤記念碑を設置することを希
望して活動を始めました。しかし直後に「加藤九祚記
念公園」構想がミルジョエフ大統領から発表され、ウ
ズベキスタン大使館から協力を要請されてこれまで活
動してきました。昨年秋、来日した加藤先生のカラテ
パ遺跡発掘パートナーであるピダエフさん (元ウズベ
キスタン考古学研究所長、現ウズベキスタン科学アカ
デミー芸術学研究所長) が、「記念碑はカラテパ遺跡内

加藤記念碑設置許可のための訪問は 4 月 21 日—27 日、ドゥシャンベで 2 泊、テルメズ 1 泊、タシケント全日と最低
限の日程です。ドゥシャンベ―テルメズ、テルメズ―タシケントは車を借り上げ陸路となり、30 万円ほど必要です。

に設置してはどうか」と提案してくれたのを受けて、
駐日大使館に働きかけていました。

加藤先生は、ウズベキスタン共和国の友好勲章受章
者であるとともにテルメズ市の名誉市民であり、ウズ
ベキスタンのミルジョエフ大統領が提案した「加藤九
祚記念公園」構想のプロジェクト責任者がスルハンダ
リヤ州 (首都テルメズ市) であることから、テルメズ
市長とスルハンダリヤ州知事との面会が必至であると
考えました。1 月、駐日ウズベキスタン大使館を訪問し、
ガイラット大使に設置の許可を得る協力を依頼してい
ました。しかしいこうに進捗状況が見えず、時間ば
かりが過ぎてきました。

昨年のシンポジウムで面識のあったゼブニソ・アリ
マルドノヴァ元テルメズ考古学博物館 (加藤先生と一
緒に 2 度楽人像前でのコンサートを実施した博物館)
館長と 2 月に入って連絡が取れて、イスロイル・テル
メズ市長、バホディル・スルハンダリヤ州知事の連絡
先を教えていただき、3 月 1 日、テルメズ市長と電話で
話すことができました。その結果、4 月 25 日にテルメズで
会う方向で合意した。しかしテルメズ市を首都とする
スルハンダリヤ州の知事にはなかなか連絡が取れず、3
月 11 日になってやっと秘書と話が通じてメールアドレス
を教えてもらい、訪問の目的を伝えることができました。
しかしその後回答はなく、改めて駐日大使館のアジゾ
フ参事官に仲介で、文化無償プログラム案をロシア語
に翻訳してウズベキスタン外務省を通して文化省、ス
ルハンダリヤ州知事に発信された。またゼブニソさん
からアンバル オリピフ・スルハンダリヤ州副知事が
加藤先生の担当となったとの連絡もいただいた。文化
省幹部との面会も調整されている。

クラブの財源も限られており、皆様の寄付を募集します。よろしくお願ひします。

【寄付口座】 ゆうちょ銀行〇一九店 当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ

シカチ・アリヤン村を中心とした環日本海交流二択

●文化遺産を絆とした環日本海交流；シカチ・アリヤン村の岩画と余市町・小樽市の洞窟壁画

●淡水漁業を絆としたシカチ・アリヤン村を初めとするアムール河と霞ヶ浦との交流

▽ この夏、岩画を絆にハバロフスクとシカチアリヤンでシンポジウムを提案

ハバロフスク地方政府とシカチ・アリヤン村は 8 月 9 日先住民族フェスティバルで、岩画の保存と文化をテーマに話しあう予定

私が、国家民族宗教を超えた新しい枠組みを志向するようになったのは、本発掘を 1991 年夏に実施したアルタイ山脈のスキタイ文化＝パジリク文化の凍土古墳を発掘するためアルタイ山脈に通っていた 5 年の間に、アルタイ山脈の先住民族と研究者の間で、生きた文化遺産である古墳を「科学」の対象と考えて調査を優先する研究者の活動と現在も埋葬祭祀の場所として「信仰」の対象とする先住民の人の思いの落差に深刻な分離を感じたことに始まり、国家や民族、宗教に対する考え方が多面的になり、特に「大国」「大民族」のナショナリズムを修正し、「少数民族への敬意」を軸に考え方を変えていかないと人類の未来はないのではないか、と思うようになったからだった。

本格的にシカチアリヤン村を訪ね始めたのは、旧ソ連が崩壊した 1991 年初冬。翌年日経新聞で視察ツアーを募集してアムール流域と沿海地方の 2 班に分かれて先住少数民族村を視察、シカチ・アリヤン村で合流して、ハバロフスク地方政府庁舎で「少数民族の自立と文化の保護」をテーマにシンポジウムを開催し、そこで提案したのがユーラシアンクラブだった。

当初の構想としては、国家民族宗教を超えて、少数民族村にウェットを置いたネットワークを形成し、情報通信機能を持った理解親睦協力のクラブを形成し、特に少数民族に敬意を表した新しい民族の共生と自然との共生を模索するというものであった。姉妹都市（姉妹村）の促進も夢であった。日本海対岸の極東地域から北部のチュコト半島までシベリア全域の少数民族村とのネットワークを夢見ていた。しかし、挫折した。当時の日本人の間で、環日本海や北東アジア、シルクロードの人々と文化についての理解がほとんどなかったこと、通信事情、交通事情も悪く、それこそホウレンソウがままならなかったこと。そして最悪だったのが、ロシアでも日本でも、何らかの「利権」の匂いをかぎ分けて集散する人が多かったことなどが原因であった。しかし、この 30 年間で、通信革命、グローバル化が進展し、少数民族村では小学生も携帯を手にし、アジアだけでなく世界を巡り、留学し、現地で生活する日本の若い人も圧倒的に増大した。日本での活動の幅も多彩となった。

私はこれまで、理解促進を中心としながら、迂回した活動を継続し、それなりに成果もあげることができた。少ないながら、この活動の目的に理解を示し、協力していただいた方がいたおかげだと感謝している。しかしこの数年、漫然と活動を続ける時期ではなくなったという思いが募った。その中で日本人クラブの脱皮を方向の一つとして、また「アジアの眼」を重視することで、改めて国家民族宗教を超えた民族の共生と自然との共生を模索する

ことを考えた。

シカチ・アリヤン村は、ユーラシアンクラブ創設の時から要に位置していた。それは、私が当時の錚々たる研究者の皆さんと創設した北方ユーラシア学会の理事・事務局長としてアルタイ山脈のパジリク王墓の発掘や渤海国の港湾遺跡の発掘に着手するなど活動していた頃から、アムール川の岸辺に集積する玄武岩に刻まれた岩画に代表されるナナイ人の村としてシカチ・アリヤン村を知っていた。この文化遺産を調査して出版したのがシベリア考古学の父オクラドニコフ、それを日本人として初めて翻訳し紹介したのが加藤先生と旧石器研究者として有名だった加藤晋平（当時筑波大学教授）であった。私は、加藤晋平先生と「日本人と文化の北方基層を探る会」を創設し、その延長として坪井清足奈良国立文化財研究所所長、田中琢理蔵文化財センター長、松本秀雄大阪医科大学学長、佐々木高明国立民族学博物館教授、もちろん加藤九祚先生も参加するというか、日本とソ連をつなぐ要の研究者として一緒に北方ユーラシア学会を創設した。会長は騎馬民族征服説で知られる江上波夫、私も理事・事務局長として参加した。最初の仕事は「アルタイ・シベリア歴史文明展」の開催だった。その後多岐にわたる学術調査をプロデュースしてきた。そして調査研究の世界から身を引いて立ち上げたのがユーラシアンクラブだった。

今回私は、サハ共和国の太鼓文化復活を支援する活動の延長として、シカチ・アリヤン村とハバロフスク市で、アムール流域先住民族芸能祭に参加する形で、愛川町の若者たちと一緒に、和太鼓、ネパールのパンズリ奏者パンチャラマ、篠笛奏者木村俊介らと一緒に音楽祭を開催し、シカチ・アリヤン村では和太鼓と篠笛のワークショップも開催し、多くの村民が参加し日本の笛と太鼓の文化に興味を掻き立てた。こうして昨年夏は、サハ共和国の若者たちと一緒にシカチ・アリヤン村からも 5 人の若者が和太鼓の研修と和太鼓フェスティバルに参加するため来日した。これもユーラシアンクラブや愛川町の多くの支援者によって支えられた。その際、シカチ・アリヤン小学校教諭で伝統芸能継承者、村のシャーマンでもあるドンカン・ピクトリヤさんも同行して来日。和太鼓フェスティバル終了後、かねて知る人ぞ知るというシカチ・アリヤン村の文化遺産岩画と酷似すると知られていた北海道小樽市、余市町の洞窟壁画を視察し、シカチ・アリヤン村村長の手紙を持参した。こうして昨年秋以来、今度はシカチ・アリヤン村とハバロフスク市で、「文化遺産が繋ぐ環日本海交流」といったテーマでシンポジウムを開催する提案書を発送する準備が続けられてきた。北方先住民族協会との協議も行われている。

提案書は、3 月に入って、シカチ・アリヤン村のニーナ村長から在ハバロフスク日本総領事館に提出され、小樽市、余市町に向けて発信された。シンポジウムの開催は 8 月の末に提案されてい

る。開催が実現するかどうかはこれからの調整次第である。見守りたい。シカチ・アリヤン村では「世界遺産登録申請」に向けた活動が少しずつ進んでいる。追い風となることを期待している。

▽ サケマス漁労の起源アムール漁労民と日本列島の霞ヶ浦漁労民の「漁労交流」模索

この夏、霞ヶ浦漁協の代表団がシカチ・アリヤン村、チョウザメ養殖場、ナナイの漁民と交流のため現地視察ツアー実施を計画

昨年夏、和太鼓交流で来日したシカチ・アリヤン村の若者ら 6 人が、神奈川県大和市の養殖場「さがみ水産」を視察したのを契機に、霞ヶ浦漁協のリーダーを訪問し、アムール川の漁労民ナナイと霞ヶ浦の漁民の【漁業交流】の模索が続いています。

シカチ・アリヤンとの文化遺産、漁業を絆とした交流の進展は、村や上部行政組織（ハバロフスク地方や北方先住民族協会）との関係、在ハバロフスク日本総領事館などとの関係が良く、期待しています。

霞ヶ浦のある茨城県知事は霞ヶ浦でチョウザメの養殖も進めており、アムール川のチョウザメ養殖場の視察を含めた、アムール川の漁労民との交流を目的に、この夏視察する計画が持ち上がっています。

私は、シカチ・アリヤン村を含め、アムール流域の若者たちが働きながら霞ヶ浦の漁業の研修のため来日した際に使用できる施設を霞ヶ浦に確保する計画です。

私がユーラシアンクラブを創設した際、少数民族村と日本の関連自治体の「姉妹村」も交流のテーマとして模索していました。これまでも山形県飯豊町とクラスニヤル村との友好都市が進みかけたこともありました。村側の対応が悪く実現しませんでした。

この夏、アムール河視察ツアーを実施する計画です。ご興味ある方はお問い合わせください。

旅行は個人旅行の考えで実施する計画で、旅行費用は実費に近い金額となる見込みです。

● お見舞い金 1000 ドルを届ける;昨年夏、佐渡島と愛川町を訪問したロシア和太鼓研修団のメンバー宅が全焼、

昨年夏、シカチ・アリヤン村から和太鼓研修青年交流に参加したアナスターシア、オクサナ姉妹の自宅が、電気系統の接触不良とみられる原因で火災を起こし、全焼しました。緊急お見舞い募金を行い、このほど 1000 ドルを送金しました。



←アナスターシア、オクサナは前列向かって左の二人

【見舞金寄付協力者】網島健二、江藤セデカ、赤川猛、四井恒夫、杉原信義、長谷川賢太郎、氏家智郎、大塚憲二、田中杏平、本間えりか、高岸美希、山田梨江、その他匿名希望 計 11 万 8 千円

● シカチ・アリヤン村教諭でシャーマン(ユーラシアンクラブ会員)のドンカン・ビクトリアさんが快挙！！ —ハバロフスク地方の民族語教師コンクールで一位入賞「最良の教師」に選ばれる—

副賞は、10 月モスクワへ招聘旅行。



水源の里愛川町の魅力を探るまちづくり懇談会～大野遼の愛川アジア塾～

「愛川町の知られざる 伝説から歴史と文化を学ぶ」

第1回 「東丹沢から見えるアジアの人類史」

・東丹沢はminiヒマラヤ。「天のイデオロギー」山に太陽と天池がある遊牧民の男性結社「天の思想」の起源。世界宗教など国家ナショナリズムを支える思想をどう考えるか。中華・華夏思想への疑義。国家を生んだ遊牧民。シルクロード史。などのお話。

日時 5/12 (日) 13:00～16:00

第2回 「アジアの音楽史とチンギスハーン」

・チンギスハーンがいなかったら江戸歌舞伎は誕生しなかった歴史。日本やアジアの琵琶、三弦の音楽史とアジア史。シルクロード史。民族興亡史と騎馬民族征服王朝説。などのお話。

日時 5/19 (日) 13:00～16:00

第3回 「人類史とシカチアリヤン村」

・バイカル起源論と日本人と文化の北方の系譜。環日本海交流のアジア史。メオ族、殷の射日神話。アマテラス岩戸隠れの世界。日本人と文化の二重構造と北方の系譜。などのお話。

日時 5/26 (日) 13:00～16:00

愛川町西部、中津川の支流にある塩川滝。七福神の一つ、江の島(藤沢市)の「弁財天」が豊かな水の聖地を求めて地下水路を歩いて来たという伝説が残る。東丹沢東端には山伏の修業道場として知られる八管神社がある。どちらもユーラシア大陸から波及した仏教の世界観が感じられると指摘する。講座ではこうした地域資源と結びつけ、アジアについての知識を分かりやすく、楽しくお伝えします



講師 大野 遼

NPO法人ユーラシアンクラブ 会長

プロフィール：加藤九祚(2016年9月中央アジアで仏教遺跡発掘中に倒れ逝去94歳)ー

・共同通信社、東京と大阪の社会部、奈良支局などで歴史文化担当記者として勤務

・北方ユーラシア学会を創設、バシラク王墓発掘、渤海湾遺跡発掘等総合プロデュース

・ユーラシアンクラブを創設し、2000年にNPO法人化

・文化庁から文化の街づくりータルアドバイザーを委嘱され、10年間務める

・駐日キルギス大使館文化アドバイザーに就任し、3年間務める

・ロシア連邦サハ共和国栄誉賞を受賞

・目標は、「アジアの通信社」「アジア・シルクロード文化村」の創設

○参加料:500円【茶菓子、資料代込】

○定員:10人 ※当日参加も受け付けています。

○場所:春日台タウンカフェあい 住所:春日台3-6-28(春日台児童館隣)

【お申込み・お問い合わせ先】 TEL090-3814-5322 (大野遼)
TEL090-8309-9099 (望月七平)

【目次：ニュースレター182号】

- 1 p 加藤九祚先生顕彰碑建設でウズベキスタン・テルメズ市、タジキスタン・ドゥシャンベ訪問
- 2 p 文化遺産でつながる環日本海交流、淡水漁業でつながるアムール河と霞ヶ浦
- 3 p 昨年佐渡島と愛川町を訪問した女性と二人の住居が火災、お見舞金送金
ドンカンさん、ロシア極東で民族語の最良の教師コンテストで優勝
- 4 p 大野遼の「愛川アジア塾」始めます

「アジアの眼」を共有し、一緒に活動する人と出会いたい。今後各地で実施の予定。

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ 発行人：大野遼
住所：〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 6314-1 TEL: 046-285-4895
FAX : 046-265-0167 E-MAIL : paf02266@nifty.ne.jp 郵便振替 :
00190-7-87777 ユーラシアンクラブ お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一
九店 当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ 会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間1口3,000円、学生会員1,000円、賛同会員
2,000円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。

<http://eurasianclub.org/>

Non Profit Organization Eurasian Club

編集後記：いくつかの大国の時代錯誤的ナショナリズムが際立ち、人類の未来が見えやすくなっている。とはいえ「未来はない」「未来はある」が微妙なことには変わりはない。まだメディアの記者だったころから国家や民族、宗教の枠組みを超えた人のかかわりがポイントだと考えていた。川越駅前の本屋で九さんの著作と50年前に出会い、大阪で本物と出会い私の運命は定まった。人類の未来に少しでも貢献できる活動が続けて終わりたい。私の当面の目標は、「アジアの通信社」「アジア・シルクロード文化村」の立ち上げにある。寝言に終わらせない。これ以上迂回する時間はなくなった。(お)